

## はしがき

本『情報倫理学研究資料集Ⅳ』は、日本学術振興会「未来開拓学術研究推進事業」の一環である「電子社会システム」部門のうちの「情報倫理の構築」プロジェクト(FINE)(プロジェクトリーダー・水谷雅彦、主拠点・京都大学文学研究科、副拠点・広島大学文学部、千葉大学文学部)の2001年度の研究活動報告を兼ねて作成されたものであり、『情報倫理学研究資料集。』(1999.3)『情報倫理学研究資料集Ⅱ』(2000.6)、『情報倫理学研究資料集Ⅲ』(2001.3)の続編となる第4集である。

本書の構成は、例年どおり第1部の論文と第2部の海外文献紹介が中心になっている。第1部では、コンピュータウィルスやVR、プライバシー、内部告発といった情報倫理学の中心的問題をテーマとする力のこもった論文に加えて、一昨年よりサブプロジェクトとして継続中の医療情報倫理学に関する研究論文が多く集まった。この領域は、昨年の「はしがき」でも述べたように、その喫緊の重要性にもかかわらず十分な研究が倫理学サイドからはなされているとは言い難い。『資料集Ⅲ』所収の諸論文とあわせて今後とも貴重な資料になるであろう。また、「情報倫理の構築」プロジェクトでは、昨年度に医療情報学会などの関係学協会との共催で3回にわたる研究集会を開催した。詳細は本資料集に掲載の板井孝一郎による報告をご覧ください。

第2部は、例年同様、情報倫理に関する海外の文献紹介である。これは、主として京都大学文学研究科倫理学研究室の院生、学生が、FINE ニュースレター編集委員会として定期的に開催している研究会の成果が基になっている。また、本年度は、情報倫理学に関する唯一の国際学術雑誌である Ethics and Information Technology (Kluwer Academic Publishers), Volume3, No.2, 2001 に収録された誌上シンポジウムを特集として紹介した。同シンポジウムは、15th Annual Conference on Computing and Philosophy (August 2000)での、Computer Ethics as a Field of Philosophical Enquiry と題されたパネル討論を基にしたものであり、いずれの論文も情報倫理学の今後のあるべき姿を示した重要な論文である。

各拠点での研究会報告の詳細な記録は、分量の都合上、本年も別冊とした。併せてご覧くださるようお願いする。なお、これまでの『情報倫理学研究資料集』は、FINE ウェブサイトの、<http://www.fine.bun.kyoto-u.ac.jp> にて順次公開されつつある。資料集以外のプロジェクト関係公刊物に関しては、資料請求番号をつけた一覧を載せたでのご利用願いたい。資料入手に関するお問い合わせは、[fine@fine.bun.kyoto-u.ac.jp](mailto:fine@fine.bun.kyoto-u.ac.jp) までご連絡いただきたい。また、情報倫理学文献センターを構築するという目的のために収集された内外の文献についても、例年どおり昨年度購入分のリストを巻末に掲載した。この5年間で、世界でも有数の情報倫理学文庫ができあがりつつあると思う。

また本年度も、プロジェクトメンバーの多くは、海外での講演、研究集会出席、研究打ち合わせなどを行った。ここでは、その簡単な報告を掲載した。

本資料集の編集は、京都大学文学研究科の水谷雅彦と奥田太郎(京都大学リサーチアソシエ

イト)、板井孝一郎(現宮崎医科大学)が主として担当したが、その他にも文学研究科倫理学研究室のメンバーをはじめとして、多くの方のご助力をいただいた。記して感謝したい。細かいミスを含めた遺漏も多いとは思われるが、それらの責はすべて水谷にある。「情報倫理の構築」プロジェクトは、本年度をもって最終年度となる。発足以来、じつに多くの方から、ご指導、ご支援をいただいていた。いちいちお名前をあげることはできないが、そうしたご助力がなければ、人文科学系としては異例ともいえるべき大型プロジェクトの遂行は不可能であっただろう。厚く御礼申し上げます。プロジェクトは2003年3月をもって終了するが、情報倫理学に関する研究は始まったばかりである。今後もプロジェクトによって獲得された有形無形の資産を基盤とした共同研究はなんらかの形で継続されるであろう。その成果をもって、さまざまな学恩への実質的な感謝の印としたいと願っている。

最後になるが、プロジェクト室で事務補佐をお願いしている木瀬貴子さんに深く御礼申し上げます。ものを片づけるという発想のないリーダーをはじめとするプロジェクトメンバーのせいで散乱する文献や書類(ゴミ?)のなかで、煩雑な書類制作のために残業、休日出勤などの無理を聞いていただいている。また、プロジェクトの遂行に多大なご支援をいただいている日本学術振興会に、深甚の謝意を表したい。

2002年6月

京都大学文学研究科  
水谷雅彦